

# 生産量日本一！ 河内長野のつまようじ

50期生

## I テーマ設定の理由

僕の地元の河内長野市はなんと、つまようじの生産量が全国の96%を占めていると聞いたので驚いた。周りで原料になりそうな木を切っている様子もないし、なぜ河内長野でつまようじが多く作られているか不思議になった。たかがつまようじだが、やはり地元のかげがえのない産業だから調べてみようと思った。

## II 研究方法

- (1) 文献調査（資料調査） つまようじの歴史、つまようじの種類などを調べる。
- (2) つまようじ工場の見学 つまようじの作り方の様子、各工場の現状を調べる。

## III 研究内容

### 1. つまようじの歴史

楊枝は日常生活の中で目立たないが、必ずといっていいほど手軽に使用されており、その需要も年々増加している。歯の清掃用ばかりでなく、料理、果物用にとその用途は幅広い。

つまようじの歴史は世界的には、メソポタミア時代（紀元前3000年ぐらい）までさかのぼる。

日本での歴史は、まず奈良時代に仏教と共にインドから中国、朝鮮半島を経て伝わった。そのころの楊枝は、木の小枝の一端を打ち砕いてブラシ状にした「齒木」というものだった。これは僧侶や一部の上流階級の人しか使わなかった。

江戸時代に入ると、房楊枝というものが生まれ、一般庶民にも使用されるようになり、長さもそのうち細く短くなり、爪先で使うことから「爪楊枝」と呼ばれるようになった。



▲図1 齒木



▲図2 房楊枝 9~30cmの柳の枝の一端を叩いて毛束にしたもの。もう片方を先細に削って尖らせつまようじのように使うか、又は先細で平らにして舌こき用にした

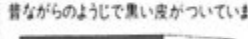
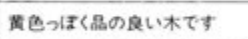
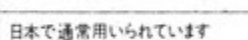
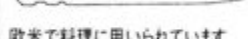
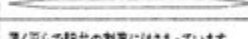
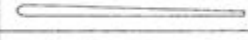

河内長野では、明治時代に楊枝作りの職人を招き、手作りで楊枝の生産を始めた。大正に入って、アメリカから機械を導入して、大量生産を始めたので河内長野につまようじ産業が発達した。

ここに、河内長野でつまようじ産業が発達した主な理由を5つ挙げておく。

- ①材料の原木が近くにあった。
- ②農家が多く、農閑期にようじを作る人手が多かった。
- ③大都市（消費地）に近かった。
- ④機械をいち早く取り入れ大量生産に力を入れた。
- ⑤製品開発に力を入れ、輸出にも力を入れた。

## 2. 河内長野のつまようじ産業

### (1) どんな種類のつまようじがあるのか？

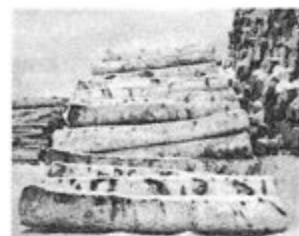
品名	形状	材質	断面	用途	巻用
黒文字 くろもじ	昔ながらのようじで黒い皮がついています 	黒文字	□	和菓子用	×
うつき COCKTAIL PICK	黄色っぽく品の良い木です 	卯木	○	果物などの料理用	×
こけし 両先ようじ COCKTAIL PICK	日本で通常用いられています  欧米で料理に用いられています 	白樺	○	果物などの料理用	×
平ようじ FLAT TOOTH PICK	薄く平らで歯の割割にはまっています 	白樺	□	歯に詰ったものを押し出す	△
三角ようじ DENTAL PICK	歯と歯の間の形に合わせて作られています 	白樺	△	歯の汚れの除去と歯グキのマッサージ	○
糸ようじ FLOSS PICK	熱りをかけていない糸の束です 	ポリエステル糸	○	歯の隣接部の汚れを除去	○

▲表1 つまようじの種類・用途

ところ、つまようじの頭が製造過程上黒くなっていたので、これを、こけしの頭にして、そこにこけしの形をデザインしたものである。だからこけしようじと言うのだ。本来つまようじは食後に使うので、使いかけを何度も置いて使うことなどないはずである。

### (2) つまようじはどうやって作られるのか？

#### ◎こけしようじ（普通のつまようじ）の作り方



▲写真1 原木(白樺)

直径約14~36cm、長さ約2.1~2.4mに切る。原木は北海道・中国のものを利用。

「白樺が材料として適している理由」  
 ・色が白く無味無臭で柔らかい。  
 ・他に用途が少ないので安価。

※ こけしようじについての2つの溝は何のため？

この2つの溝は、そこだけ折って、使いかけのつまようじを置くために使う、「ようじ置き」にするのではない。この説はある経済学者が述べたもので、「これは日本人のすばらしい知恵だ。」とほめたたえたそうだ。そして、その説はもっともらしかったので全国に広がった。が、実際は、ただのまっすぐなつまようじでは愛想がないので、何かデザインをしようと考えた



▲写真2 玉切り  
約35cmに切る。



→▲写真3 煮沸  
約4時間熱でむす。



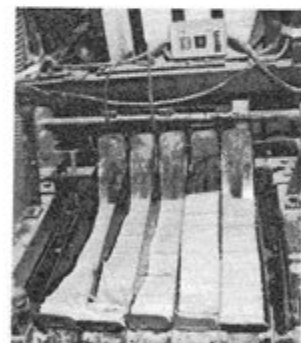
→▲写真4 かつらむき  
厚さ約2.5mm。  
带状にする。



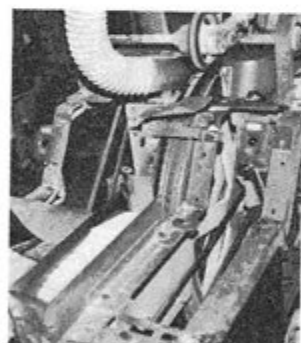
▲写真5 断裁  
短冊状の板にする。  
幅約5cm。



→▲写真6 軸カット  
ひご(丸軸)にする。



▲写真7 棒切り  
ようじの長さ(約66mm)  
に切る。



→▲写真8 成型・先付け  
つまようじの形に  
けずる。



→▲写真9 包装



▲写真10 出荷

◎黒文字の作り方



▲写真11 割る



→ ▲写真12 引く



▲写真13 切る



→ ▲写真14 けずる

(3) 現在のつまようじ産業

河内長野市には、現在約20社のつまようじ会社があるが、いずれも従業員が少なく、小規模で家内工業的にやっている所が多い。

僕は、河内長野市内にある3つの会社（広栄社・やなぎプロダクツ・八田商店）を訪ね、現状を調べてみた。

広栄社

以前は、糸ようじを省く全ての種類のつまようじを作っていて、輸出も多くしていたが、10年程前の円高の影響で、中国産などの安い製品が市場に出回り、河内長野のつまようじも売れなくなり、きびしい状況になった。（この状況は、河内長野のどの会社も同じ。）このことにより廃業する会社も出て、他の会社も生き残りをかけてさまざまな工夫をしてきた。

広栄社では、三角ようじ以外のほとんどのつまようじ生産を中止し、サンスターの会社の下請けとして、10年前からプラスチック製の糸ようじや歯間ブラシの生産を始めた。なおプラスチック製品を作る機械は自社開発した。

その他、普通のつまようじを少し、個別包装した製品にして、レストランや航空

会社の機内食用に出荷している。

やなぎプロダクツ

この会社も、円高の影響を乗り越えるため、少しでもつまようじを安く作るために、中国に合弁会社を設立し、工場を移した。中国の他に北海道にも会社がある。中国の工場で、包装までして、直接輸出したり、日本国内に出荷したりしているのである。

現在作っているつまようじは、ほとんどの種類のものであるが、これらも河内長野市内で作っているのではなく、北海道と中国で2:3の割合で作られている。

輸出もされており、両先ようじ（ダブルポイント）が主にアメリカ、ヨーロッパ諸国に輸出されている。国内の販売先は、デパート、コンビニ、スーパー、問屋、おかし屋（黒文字）など。そしてなんと現在市場に出回っているつまようじの70%がこの会社のものである。

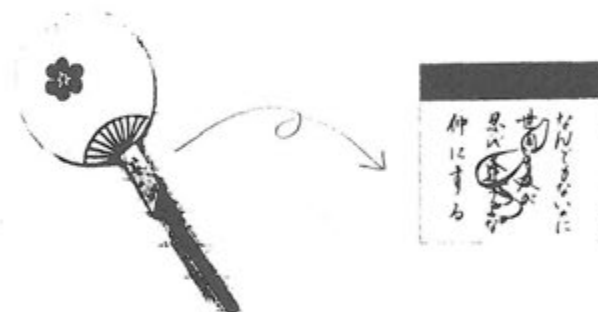
また、つまようじだけでなく、他の製品（竹ぐし、しゃもじ、割ばし、巻きす、など）も作られている。これらを作るための機械は自社開発した。

八田商店

この会社は黒文字しか作らない黒文字専門店である。茶道具としての黒文字100%がこの会社の製品でライバル社がない。年間売り上げは1億2000万円～1億3000万円にのぼる。ただし、黒文字は輸出されていない。外国人には黒文字独特のにおいが好まれてないらしい。

主な販売先は、京都の問屋、茶道具店、デパート、黒文字専門店などである。

また、和風の包装をした小ようじも、八田商店が考案した。



▲図3 民芸小ようじ 一本一本に和風の包装をし、唄（川柳）を書いた小さな紙を巻きつけ、手のこんだ包装をしている。なお、この民芸小ようじは河内長野市の特産品として市から指定されている。

(4) 現在のつまようじ産業の問題点

- ・最近、つまようじ会社と無関係な輸入業者が、中国などから安いつまようじを輸入し、売るので国内産のつまようじが売れなくなり経営が苦しくなっている。
- ・つまようじの値段が安いから量を多く売らなければ利益が少ないのだが、

その量もそんなに多く売れない。つまようじという商品はそんなに多く必要としないからである。

- つまようじが爆発的に売れないのは、つまようじにヒット商品がないからである。つまようじにヒット商品はなかなか作りにくい。
- 三角ようじは、日本人は歯の衛生にあまり関心がないので売れない。いかに三角ようじを知ってもらおうかがこれからの課題である。
- 黒文字に関して、やはり中国の製品が追いついてきて日本の製品が売れなくなっている。
- お茶をする若い女性が減って、黒文字の消費も減ってしまった。
- おかし用の黒文字は洗って何度も使えるので、ある一定量以上は売れない。
- 黒文字職人が高齢化し、あとをつぐ若い人がいない。
- 河内長野は大都市圏地域に立地していて、近年内職事業者は次第に確保が難しくなっている。

#### IV 結論

かつては全国の96%という生産量をほこっていたが、10年程前から円高の影響やヨーロッパ諸国の不景気により輸出が落ちこみ、韓国や中国などの安い製品が入ってきたため、状況はだんだん厳しくなった。そのために廃業に追いこまれた会社も出たが、なんとか生きのびる努力を試みた会社もあった。そして現実には、河内長野市内では、ほとんどつまようじ生産は行われておらず、北海道や中国で作られていることが分かった。数値は明らかではないが、中国・韓国からの輸入品も増えてきている。

#### V 総括

河内長野でつまようじ産業が栄えていることを期待して調べ始めたが、実際は非常に苦しい状況にあることが分かりショックを受けた。世の中に知れ渡っている事柄が実際は、名前だけで、全く違う状況であったりすることがあると分かった。

#### VI 参考文献

- ・「わたしたちの河内長野（3年生）」 河内長野市教育委員会
- ・ビデオ「ええまちええもん」 つまようじ編 河内長野市役所
- ・知ってもらいたい（第328回）「楊枝史話」 稲葉 修
- ・「YANAGI」 やなぎプロダクツ総合カタログ
- ・サライ 1994年第4号 生活見直し術「楊枝」
- ・「TSUMAYOJI GALLERY」 河内長野つまようじ資料室パンフレット
- ・1993年2月「My Self」 いきいきわが街—河内長野市